

## 「大衆操縦」の心理的基盤

### 折橋 徹彦

#### 一 社会統制と大衆操縦

従来、大衆操縦は特殊な社会状況における社会統制の一形態として扱われてきた。本稿においては、両者の心理的基盤に接近するために、社会心理学のパースナリティ理論がどのように適用されてきたかを検討する。

われわれは一般に、社会における集団内の秩序を維持するための社会過程を社会統制という。これはある社会における権力による支配という統制のみを意味するのではない。すなわち、政治、警察、軍事、宗教などあらゆる社会集団には社会統制が作用する。この統制は社会集団の組織の強さ、あるいは成員に対する強制力の度合によってさまざまな形態をとる。その形態に関しては一般的に、風習、慣行、規範及び流行等が考えられる<sup>(1)</sup>。これらの相違点は、風習が、一定の集団の成員の個体保存の欲求及び社会活動の欲求を統制するのに対して、慣行では集団をふくむ社会の利害も問題になってくる。規範は、法律あるいは規則といった合理的な要素からなる社会統制である。流行

のみが社会自体に対して何らの実用性をもたない統制であるといわれる。

このようにみても、社会統制の概念は、特定の社会あるいは集団にのみ存在するのではなく、人間によってつくられるあらゆる社会集団に広く存在しているといってもよい。

これに対して大衆操縦の概念は一応は社会統制の一部とされるが、その成立はあくまで大衆社会状況の段階においてである。そしてこの大衆操縦と関連する心理的要因は社会統制における心理的要因とはかなり異なった性質をもつはずである。

すなわち、大衆操縦が問題にされる現代の大衆状況における社会的アノミーがこの問題の前提となる。社会的アノミーは現代の大衆社会化した資本主義社会における一種の社会病理的現象であるといわれている。

大衆操縦はこの矛盾を心理的な次元で解決しようとする権力による手段であるといわれる。ミルズによれば大衆操縦は権力者による物理的な力による統制である強制と異なる。「操縦は秘密にされたあるいは非人格化された権力の行使であり、それに影響されているものは、何をしているかということをはっきりと語られないが、それにもかかわらず他人の意志に従っている<sup>(2)</sup>」という状態である。すなわち、かくされた権力による心理的な統制を意味する。フロムはこのような統制を可能とする基盤を「個人が自動人形となり、自我を失いながらも、しかもなお同時に、意識的には自分は自由であり、自分のみ従属して

いと感じるような<sup>(3)</sup>心理的状态として規定している。

このように簡単にみでることからも、社会統制をささえる心理的要因と大衆操縦にみられる心理的要因にはかなりの相違があることがわかる。これらの心理的基盤の相違を、社会過程における心理的要因すなわちパーソナリティ特性(traits)との関連においてとらえよう。

## 二 社会統制と超自我

まずはじめに社会統制を問題にしよう。社会統制に関する心理学的アプローチは、パーソナリティ形成と社会規範の内面化という問題としてとらえられる。

社会心理学におけるパーソナリティ理論の基礎の一つとされている精神分析学派におけるパーソナリティ理論では、この問題は超自我の問題として扱われている。

フロイトの超自我の概念は、エディポス・コンプレックスを前提としている。それは人間社会における統制機構、すなわち、道徳、宗教の心理的源泉である。

フロイトによって展開された超自我はあらゆる文化・社会において普遍的な統制の心理的メカニズムと考えられる。しかし、リビドー、抑圧、エディポス・コンプレックス、超自我という心理的連環を前提とすることによって、社会統制のメカニズムそれ自体が神経症的特徴をもつことになる。フロイトは、あらゆる道徳、宗教、法律といった社会統制の源泉として、近親相姦タブーをおき、それをエディポス・コンプレックス

スによって生じた小児神経症の特徴と類比させた<sup>(4)</sup>。

ホルナイはフロイトの超自我概念が神経症的なものであることを指摘して次のように述べている。「フロイトの「超自我」を考察すると次のようにいえる、すなわち、ある神経症のタイプでは殊に固いそして高い道徳的水準に固執しているように思われる。かれらの生活にみられる動機づけの力は幸福への願望ではなく正しさと完全へのあくなき衝動である。かれらは「べきである」とか「ねばならぬ」ということによって支配されている。」

超自我のもつ完全性への神経症的な欲求はフロイトの本能理論にもとづくものであり、フロイトによれば超自我はナルシズムのかつマソヒズム的なそして殊に破壊的衝動からなるものであるとされる。また、超自我は子供に対して禁止的な態度をとる親のイメージが内面化されるということにおいてエディポス・コンプレックスの残滓である。このことからフロイトにおいて超自我は圧倒的に禁止的 성격の内面化された力と考えられる。

このように超自我と関連した道徳意識は、自己に敵対的な道徳意識であり、ここから不安、劣等感、自己に対する非難などという心理的葛藤が生じる。

このフロイトの見解によれば、自己に敵対的な規制と理想との区別が出てこない、すなわち、規制の自己に調和的な道徳的目標からなりたっているという側面が無視され、道徳的目標のサディズム的な違法行為の結果でてくるという面のみが強調されていく。

フロイトでは社会統制は神経症的なものであり、社会におけるあらゆる統制行為は病理的な現象ということになる。ホルナイはフロイトの社会統制の心理的基盤に関するこの点を指摘し、社会統制には病理的な側面とノーマルな側面の二つの面があるとした。

アメリカにおける精神分析学派のパーソナリティ理論では社会における統制行為の心理的基盤には神経症的なものとノーマルなもの二つの面があることが指摘された。

われわれは、この問題を、フロイトの精神分析学理論がアメリカに渡って多くの修正を受けたことと関連していることに注目しなければならぬ。すなわち、アメリカにおける社会心理学理論のなかでの社会統制の考え方が問題となる。

マーフィーは、この例としてポールドウィン、クイリ、ミードにおけるパーソナリティ理論の問題をあげている。かれらにおいては自己とか個性がその直接の関心の対象となっており、その場合、個人の社会化の過程で同化される価値とか規範の問題よりもむしろ個人とかれをとりにまわく対人的関係が問題となる。そして、自己と他者との対人関係を媒介として社会的規範の内面化の問題が展開されている。ここにおいて、フロイトにおける神経症的な統制の心理的メカニズムと、対人関係を媒介とした規範の内面化という二つの統制の心理的メカニズムがアメリカ社会心理学のなかに準備されることになる。

社会統制と大衆操縦の心理的基盤をなすパーソナリティに対するこの二つの見解は、フロムにおいて「社会的性格」と「自

動人形」の概念として展開されている。

### 三 社会統制とパーソナリティ

社会的性格の特徴についてフロムは「社会的性格は個人のもっている特性のうちから、あるものを抜きだしたもので、一つの集団の大部分の成員がもっている性格構造の本質的な中核であり、その集団の基本的経験と生活様式の結果発達したものである。」と述べている。この社会的性格は社会過程のなかで、個人が社会的条件に適應するために形成されていくものである。すなわち、社会的要請、これも一種の社会統制の機能と考えられるが、を個人自身による自発的な欲求へと転化していく過程がそのうちにみられるわけである。

フロムは近代社会における人々の仕事への意欲をその例としてあげている。「社会的性格は外的な必要を内面化し、しいては人間のエネルギーをある一定の経済的社会的組織の課題に準備させるのである。」

社会的性格の形成にあたってフロムは教育過程をまず問題にしている。フロムは、フロイト精神分析理論から導きだされたパーソナリティ形成の理論において排泄の習慣形成の影響が過大評価されていることに批判的である。すなわち、この排泄の習慣形成による教育過程、さらに複雑な教育過程は社会的性格の内容は規定せず、それは一定の社会経済的価値体系のうちにありとされる。

社会的性格を規定するものとしてフロムはどのようなものを

考えているのであろうか。人間の生存という基本的欲求にもとづく生産過程がもつとも根本的なものである。そのために生産手段が規定され、これが特定の社会関係を規定する。この第一の条件に、さらに、フロムはカーディナの二次的の制度を批判し、宗教、政治、哲学的観念それ自体は社会的性格に根ざしたものであるが、それ自体も社会的性格を規定するという。

さらに、社会的性格の起源及びその機能についてのフロムの見解を考察してみよう。フロムは社会的性格の内容は、個人が文化のなかで演ずる役割によってきまってくるという。すなわち、このことからすれば、ある個人の社会的役割によってかれが内面化しなければならぬ社会的規範は異なってくるわけである。これに対して、社会的性格をつくりだす方法が次に問題となってくる。この方法とは、家族、教育機関などにみられるものである。

それは「成長する子供の性格形成にたいして両親の性格が影響するということである。多くの両親の性格は、社会的性格をあらわすものなので、両親はこの方法で社会がのぞむ性格構造の本質的な特徴を子供につたえる。」

すなわち、教育は、社会的性格の内容をつたえる伝達のメカニズムであって、その内容はその社会がパーソナリティに望んでいるもの、すなわち、ある社会の社会経済的構造によって形成されている、政治、宗教及び社会的諸規範及び諸価値である。いいかえれば、「両親自身のパーソナリティのなかに、その社会や階級の社会的性格があらわれているということである。両親

親はかれらが現にあるがままで、ある社会の心理的環境とか精神とかいふものを子どもにつたえる。」<sup>(10)</sup>ということである。

この社会的性格をもつパーソナリティの形成の過程をこのように考えてみると、例えば家族が子供の政治的傾向を規定するということも考えられる。ハイマンはある個人のうちにみられる政治的な態度の一貫性をパーソナリティ要因との関連で問題としており、個人の政治的態度と家族の関係を次のように考えている。「個人の政治への社会化のエージェントに関するいろいろな問題を資料的な裏づけによって論証しようとする研究には、態度あるいは行動の決定要因として家族どうしの関係がどのように作用しているかという研究がある。子供が両親に依存しており、政治的な見解について一致がみられるならば、家族は政治を子供に伝達することになる。」<sup>(11)</sup>

しかし、ハイマンはこの場合、子供をとりまく環境と両親によって意味づけられ、イデオロギー的な用語でいいあらわされている環境にギャップがあることを指摘している。子どもの環境を支配する、社会的現実との関連でつねに変化しているイデオロギーは両親のうちに固定化されているもの、とはことなっ

てしまっていることが多く、単純に家族内の政治的態度の伝達を仮定することはむづかしい。  
しかし、フロムにおいて、さきに述べられた社会的性格には、一応、親から子へのイデオロギーなどを含む社会規範の伝達が考えられている。すなわち、親から子への伝達、そして個人が社会的役割をはたす過程でパーソナリティに内面化される諸

価値が考えられる。このいづれも、個人のなかで欲求に転化していく。この諸個人の欲求と関連した思想やシンボルが人々におくられるとき、人々はそれに呼応し、行動するのである。

ここで、検討してきた範囲では、社会統制の心理的基盤はノーマルなパーソナリティのうちのみいだされる。このような状況においては、たとえ、そこにもちだされてくる社会統制のプロセスに対する反対や、それにもなう葛藤があったとしても、それはノーマルな心理的現象とみなされる。

「社会運動の心理学を研究するにあたって、いちばん問題とされるのは、運動にみられる習慣的な行動ではなく、人々の信念や意見である。個人の心理的な世界にみられるような要素が、心配、恐れ、不安あるいは欲求不満のために激しくかき乱されるとき、彼の一部分となっている規範や価値を疑いはじめるとき、しきたりとなっている社会的な枠が、明らかに、もはや彼の欲求を満足させなくなるときに、社会的な基準と個人の私的基準との間に、深刻なくい違いが生じる。」

このような既成の社会統制を破壊するような心理的基盤が生じたとしても、ここにみられるパーソナリティは正常に機能していると考えられる。

#### 四 大衆操縦と自動人形

社会的性格の基礎となるパーソナリティの形成過程のなかにもみられた、社会規範の内面化、及び、これらのパーソナリティを基盤として社会過程に作用する社会統制の問題は、あくまで

も、体制的な相違はあっても、社会に一般に作用する統制機能と、それをささえる心理的基盤の問題であった。

これにたいして、われわれはここでは現代の大衆社会状況において特有とされる大衆操縦の心理的基盤を問題にしよう。フロムはこれを現代人が経験する自動人形化の心理として問題とする。

「われわれはみずから意志する個人であるというまぼろしのもとに生きる自動人形になっている。……根本的には個人の自我は弱体化し、そのために無力感と極度の不安とを感じる。……自我喪失の結果、順応の必要が増大してくる。」

フロムはこのような状態は、近代的産業組織のなかの、特に、独占的局面でのいろいろな要因が、孤独感、無力感を感じるパーソナリティを発達させる結果生じたものであるという。ここでは、このような状態にあるパーソナリティを全て病理的なものと規定してしまうわけにはいかないが、自己による自発性を失いかけていることは事実である。

この自発性の欠如が大衆操縦の心理的基盤において重要な問題となってくる。フロムは二十世紀における資本主義社会におけるパーソナリティの問題をマルクスによってつかわれた「疎外」の概念でとらえようとする。疎外という言葉は本来は精神病患者を意味しているのであるが、大衆化した資本主義社会においてみられるものは、日常行動においては合理的な行動はとりうるが、精神的に、殊に統合された自我を喪失しかけた、創造的な社会的適応ができなくなった状態をいう。

フロムによれば、社会経済的構造がこのような社会心理的な障害の源泉にあることになる。それはさまざまな虚構を形成することによって、個人に影響をあたえることになる。しかし、個人は単に社会的な反映としてこのような心理的狀態にあるのではない。

これは個人の精神発達過程にみられる個性化の問題と関連する。子どもは母親と一体であるが、まず生物学的に分離し、さらに精神的に独立する。この個性化には二つの問題が関連してくる。すなわち、個性化の過程で孤独が増大し、無力と不安の感情におそわれることである。これに対処する方法として、第一の個性をすてて外界に没入するものと、第二は人間や自然に対する自発的關係をむすぶことである。

現代の社会状況のもとでは人間や自然に対する自発的關係を結ぶことは困難である。大衆社会状況のもとで生きる人々の多くは、孤独を回避せんがために集団に没入するケースが多い。そこでは個人の自我の自主性は次第に失われる傾向にある。

この心理的基盤のうえに大衆操縦という社会統制の一つの過程が適用されてくるわけである。すなわち、大衆社会状況におけるアノミー的な心理状態が人々に広がっているところに大衆操縦の可能性がでてくるといえる。

人々の自我が弱体化している状況では、かれらの無意識的なコンプレックス、たとえば欲求不満からくる攻撃傾向に訴えかけることが容易になっている。その場合は、体制的エリートは

危機的な状況においつめられれば、それだけ、民衆に対して、その心理的に弱体化した面に自己の正統性をうたったイデオロギーを注入しようとする。

##### 五 これからの問題

社会統制及び大衆操縦の問題は現代における民衆の社会あるいは政治行動を分析するうえに重要なものである。社会統制の問題は古典的にはロスやサムナーなどによって論じられ、道徳から政治の領域にわたって多くの問題を内包している。ここでは主として、その心理学的側面のみを扱ってきた。しかし、この研究において特に問題としたかった点は、大衆操縦の概念が単に大衆社会状況における社会統制の一部であるということだけではなく、両者の心理学的な基礎づけにおいて、大衆操縦と社会統制は社会心理学の二つの異なった理論的背景をもつということである。すなわち、それは学説史的承譜においても異なっている。大衆操縦では精神分析学における自我の発達に関する面が問題になっており、フロイトがかつて社会統制の心理学を試みたとき適用できなかったいくつかの概念は修正された形ではあるが操縦の対象となる大衆の心理的特徴をあきらかにしている。すなわち、大衆操縦においては病理的な心理状態が前提となる。これに対して社会統制においては、道徳の起源を神経症との類比で考えたフロイトではなく、社会的規範は対人的状況を媒介として内面化されるというポールドウィン、ミードの心理的な前提の方がより多くの現象を説明できる。

こうして、心理学的な側面からこの二つの概念に接近すると、心理的な基盤で統制するということは両者についていえるが、社会統制ではその過程はあくまでも民衆あるいは被統制者のノーマルな心理に作用し、これに対して、大衆操縦では被統制者の病理的な心理に作用するという点が相違していると考えられないだろうか。

以上は、主としてアメリカにおける社会心理学において、社会統制及び大衆操縦に関する心理学的な問題、殊にパーソナリティの要因がどのような形でこれらのの問題に適用されるかを検討してきた。

この問題をさらに、現代日本における大衆操縦の分析へと展開していくには、いくつかの段階を経なければならぬ。すなわち、社会統制及び大衆操縦の社会学的な概念規定、大衆社会状況の規定及びその心理的特徴といわれる自然性を失った民衆の心理の規定がまず必要である。しかし、これらの問題を現代日本社会に適用する際にでてくる多くのギャップを見過せば、あらゆる理詰りの基礎づけは無意味なものとなる。

(1) 南博『体系社会心理学』一九五七、三九二—四二五頁。

- (2) C. W. Mills, *White Collar*, 1951, p. 109.
- (3) E. Fromm, *The Fear of Freedom*, 1942, p. 208.
- (4) S. Freud, *Totem und Tabu*, 1913.
- (5) K. Horney, *New Ways in Psychoanalysis*, 1939, p. 207.
- (6) G. Murphy, *The Internalization of Social Controls in Freedom and Control in Modern Society* ed. by W. E. Moore, 1954, pp. 6—7.
- (7) *The Fear of Freedom*, p. 239.
- (8) *ibid.*, p. 243.
- (9) H. Hyman, *Political Socialization*, 1960, p. 69.
- (10) *The Fear of Freedom*, p. 245.
- (11) *Political Socialization*, p. 123.
- (12) H. Cantoril, *The Psychology of Social Movements*, 1941, pp. 15—16
- (13) *The Fear of Freedom*, p. 218.

(一橋大学大学院学生)